

日本における「南洋」の形成—森小弁の場合を例にして—

小松和彦

国際日本文化研究センター

はじめに

「開化期」のミクロネシア——後に「南洋群島」と呼ばれることになる地域——は、ほんのわずかな日本人がたまたま現地を訪れるという経験をもっただけで、日本に在住する政治家や経済人、知識人を含むほとんどの日本人にとっては、思考の外の領域に属していた。そのような状態のなかから、次第に「南洋」が日本人の前に立ち現れてくる。その時期は明治10年代から20年代にかけての時期であった。

では、当時の日本人は「南洋」をどのようにイメージし、どの^{もりこべん}ように現実の世界として「南洋」を体験したのだろうか。本稿の課題は、そのことを森小弁という人物を媒介にしながら考えてみることにある。

1 パラオ人（ミクロネシア）が描いた日本人のイメージ

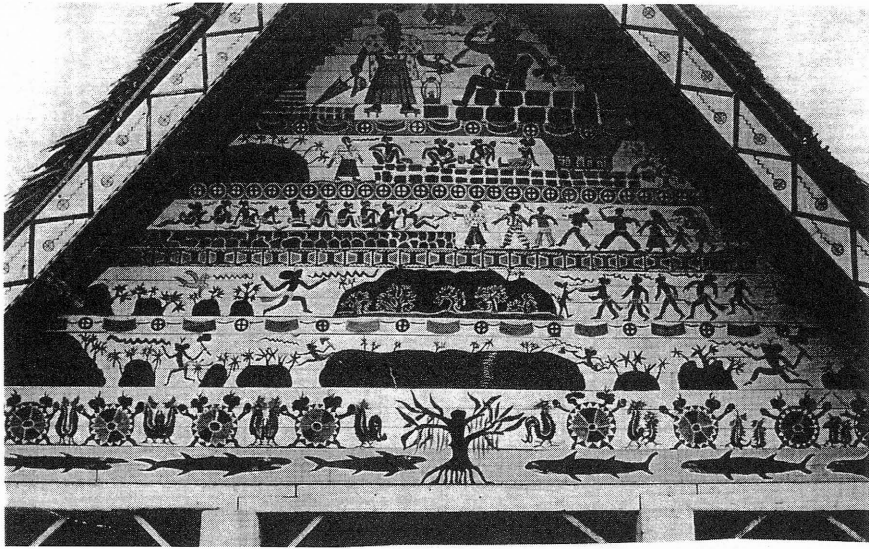
本稿を考えるそもそものきっかけになったのは、たまたま目にした一枚の写真であった（次頁写真参照）。

能仲文夫の『赤道を背にして』（昭和9年）の復刻版の表紙を飾っていた写真である。この写真は昭和39年に、当時、毎日新聞社の写真記者であった民俗写真家・渡辺良正が撮影したもので、当時の国際連合米国防託統治領パラオ地区（現在のパラオ共和国）のアバイの破風板に描かれたいわゆるストーリーボードである。このアバイは戦後の昭和28年、南洋貿易の焼跡に、アメリカの資金援助で、コロール・コミュニティ・センターとして建てられたものであった。

しかし、残念なことに、このパラオのアバイは、昭和42年の台風で倒壊し今はない。

ストーリーボード（絵物語板）といえば、現在のパラオを代表するような観光・みやげ品になっているストーリーボードを想い浮かべる人が多いが、その起源はパラオの神話や伝説の一場面や動植物などを描いたアバイなどの装飾絵にあった。それを一枚の持ち運べるような一枚板にして観光土産品にするようになったのは、彫刻の技術をパラオ人に教えた土方久功であるとされている。もちろん、この写真の絵は、アバイに描かれたものであるので、観光用に作られたものではない。戦後、このアバイを建てたときに、パラオ人が相談してその素材を考え、そして描いたものである。おそらく、日本時代に日本人から教育を受けた人たちが中心だったのだろう。

興味深いのは、ここに描かれているのが、よく見られた、植民地化する以前のパラオの神話や伝説を描いたものではないという点である。それは、棟に近い最上段のひときわ大きく描かれた二人の人物の左側の人物の姿を見ればすぐにわかる。日本人が描かれているからである。この男は右手に洋傘を、左手に大きな鋏をもった袴姿で下駄をはき、石油ランプを足元に置いている。この男のいでたちは明らかに、明治時代に一世を風靡した「壮士」のそれである。右側の男はパラオ人で、壮士に鋏（武器）を突きつけられているので、きっと首長であろう。つまり、ここには、日本人によるパラオ人との暴力的な「出会い」の様子が描かれているのである。この絵を、日本時代を知るパラオ



人の古老数人に見てもらったところ、すぐさま日本人がパラオ人を武器で脅かしているところだと理解した。また、この絵をみたパラオ博物館の学芸員は、ここにはパラオやミクロネシアの近代史が描かれている貴重な史料だと述べた。

たしかに、その出会いは暴力的な出会いであったが、注目すべきことに、この一連の絵物語は、日本人を全面的には否定的に描いてはいない。小菅輝雄の解説によれば、最上段は、明治・大正時代に、気骨ある日本人壮士が南洋に渡って来て、日本刀（この絵では鋏）でもって島の人々をおどし「働く事」を説得している場面、その下の二段目の絵は、お互い意見を交わしたが島民の同意を得られず、島の人々は相変わらず坐っている場面、三段目は、この壮士（日本の海軍の人々とも読める）が日本から、囚人とおぼしき人や元氣そうな男たち、さらにはその妻や子供、老人（傘をさした人）まで島に連れてくるとともに、鋏（武器）で働かない島民たちを脅して強制的に働かせている場面、四段目は、島民たちが一生懸命に働き、このために大きな島の大地からパンの木が芽を出して生い茂ってくる場面、最後の段は、ヤシなどの作物が大小さまざまな島々に生い茂り、たくさんの魚が穫れ、お金が島に満ち溢れている場面である。

すなわち、結果的には、勤勉に働くことが幸福になれるということを、日本人が教えてくれたのだ、という物語になっているわけである。敗戦によってアメリカの統治下にあったパラオの島民自身が、なんの強制も受けずに素直な気持ちで、日本人との出会いを表象したストーリーボードとして、これはきわめて貴重である。

もちろん、この日本人壮士の姿がパラオの島民のすべてにとって日本人と読み解かれたわけではないかもしれない。幼い子どもたちには、「文明」と「武器」をもった「外国人」一般を意味していたかもしれない。ましてこの袴の男を「壮士」と認定できる島民は少なかったに違いない。しかし、近代史に明るい日本人がこの絵を見たならば、「壮士」らしいと判断することは容易である。

そして、わたしは、この絵の「壮士」の姿に、まさにこの絵物語に描かれたような人生を送った、南洋に渡ってその地に転住して亡くなった一人の「壮士」、すなわち明治24年（1891）に日本の発ってトラック島に渡った森小弁をダブらせたとってきたので

ある。

それでは、この森小弁は、どのような思いからミクロネシアに渡ったのだろうか。どのような時代的背景があったのだろうか。

2 森小弁との「出会い」

ここで少し個人的な話をしておこう。私が森小弁の名前を知ったのは、20年ほど前、トラック島での初めての調査を行おうとしていたときであった。トラック島での調査の経験がある考古学・民族学者の高山純氏が、いまではトラック島の経済界に君臨する森小弁の息子や孫に当たる方を何人か紹介してくれたからである。まったく知り合いのいないトラック島に着いた私は、森小弁の長男太郎の長男にあたる正隆氏を訪ね、彼が経営するベイ・ビュー・レストランの二階のかつてはホテルであったという汚い部屋に超廉価で宿泊させてもらうことになった。そのとき、問わず語りに祖父森小弁の話を断片的に耳にしたのであった。

まず、「小弁」という変わった名前が印象的であった。その小弁がこのトラックに来島したのが明治時代中期というはるか昔のことであったことに驚かされた。しかもその当時はトラック諸島の島々には統一的な支配者はおらず、島々が互いに隙あれば戦争をしかけるという戦国時代のような状態にあり、かれらの武器は独特な形をした棍棒と投石であった。そこで森小弁は日本から持ち込んだ強力な銃器・刀剣によって彼らを征服するという野心を抱いていたらしいことも知らされた。また、来島した最初は、その野心の実現のために原住民の首長の娘を妻に迎え、商売をしていたが、それが実現する以前に、日本がこの地域を領有することになったので、商売の方に力を入れ、その子孫は、現在のトラックに経済界の中核を占めていることや、戦後になって多くの日本人から、戦前の人気漫画『冒険ダン吉』のモデルとみなされた人物であることなども知らされた。

その時から、私はトラック島で巨大なファミリーを形成している森ファミリーの祖である森小弁に興味を抱き続けてきた。しかし、歴史学者ではないので、日本時代以前にまでさかのぼる森小弁の人生をどのように明らかにしたらいいのか皆目わからなかった。また、人類学者として、現在のトラック人の生活の調査の方に関心があったこともあって、調査地に選んだパッティウ地域（日本時代では北西離島とかエンタビー諸島と呼ばれていた）のボンナップ環礁ボンナップ島の調査に集中し、しだいに関心も薄れていった。

ところが、私のなかで急速なかたちで再び森小弁への関心が膨らんでくることになった。そのきっかけとなったのは、森小弁がボンナップ環礁の人々とまったく無縁の人物ではないということがしだいに明らかになってきたからであった。森小弁の妻イサベラの母系氏族はエレゲータウといい、その本貫の地がボンナップ環礁のタマタム島であったのである。ボンナップ環礁の島民たちのあいだでは、森ファミリーにはエレゲータウの血が入っていることで知られていた。

3 南洋に渡った「壮士」

それでは、この森小弁はいったい、どのような人生を歩んだのだろうか。現在でもっとも詳細な伝記は、1998年に刊行された高知新聞記者森沢孝道が書いた『夢は赤道に』である。これは高知新聞に連載された記事をまとめたもので、日本統治時代のミクロネシアの歴史を丹念に描き出したマーク・ピーティ어의『南洋——ミクロネシアにおけ

る日本人の盛衰 1885-1945』のなかの「森小弁」に関する記述も、おおむねこれによっている。森沢によりながら、小弁の生涯を簡単に辿ってみよう。

森小弁は土佐藩の郷土の子孫で、明治2年(1869)、高知県土佐郡北新町に生まれた。父可造は小弁が生まれたとき失職中で、2年後に大阪府の役人になって大阪に家族とともに転居するが、明治13年に病没し、小弁は故郷に戻り、祖父の養子になる。旧自由党急進派が企てた、当時清の支配下にあった朝鮮王朝の武力革命計画(いわゆる「大阪事件」)に連座して逮捕されるといった青年時代を送る。明治22年20歳のときに上京、翌23年には、政界の大物であった後藤象二郎の玄関番になる。そのかわり東京専門学校にも通学していたという。この後藤の長男が、鈴木経勲とともにマーシャルに渡ったとされている後藤猛太郎であった。もっとも、高山純の研究によれば、後藤も鈴木も、虚偽の報告をしてどこかで時間をつぶしたらしく、実際にはマーシャルには行っていなかったという。

そして、明治24年(1891)、小弁は、後に述べる、田口卯吉が設立した「南島商会」の業務を引き継いだ「一屋商会」に入社することになる。この経歴からわかるように、当時彼はいわゆる「壮士」とか「書生」と呼ばれた政治青年の一人であったのだ。

この年の12月、小弁は同僚の小川貞行とともに、一屋商会の「天佑丸」で南洋に向けて出発する。台風に苦しめられながらも、船は目的地のボナペ島に到着し、同僚の小川は下船した。ここには田口が設けた「南島商会」(一屋商会)の支店があり、駐在員もいた。しかし、小弁はここで降りなかった。

この行動がボナペ以外の新しい交易地を探せという社命であったのか、それとも社命に反して自分の「野心」を満たしてくれそうな島に出会うまで降りないという気持ちからであったかは定かではない。横田武の「南洋先駆の第一人者森小弁翁」によれば、ボナペ島からトラック島に来る途中のモキール島やピングラップ島などの無人島に立ち寄って上陸を企てたが、あまりに小さな島だったので断念したという。ということは、無人島の「主」になり、そこを「野望」の拠点に考えていたことになる。彼の本意は「一屋商会」に社員になることではなく、それにかこつけて「南洋」に飛び出ることだったのだろう。

明治25年2月、「天佑丸」はトラック島のウェノ島(旧春島)に到着する。小弁はここで小笠原で雇った漁師七名とともに下船する。しかし、数ヶ月後にこの漁師たちはボナペに移動したので、このトラックに小弁一人が残ることになった。このとき、トラック島には四人のドイツの商人が商売をしていた。

もっとも、ほどなくして快信社のトラック支店が開設されたり、解散した一屋商会を引き継いだ「南洋貿易日置合資会社」などの社員・代理人が出入りすることになり、次第にトラック在住の日本人商社員も増え、明治28年頃は四名の日本人が住み、明治32年にはその数が14人になっていた。小弁も南洋貿易日置合資会社の社員になっていた。また、明治31年には、小弁は、ウェノ島のイラス村の「首長」の娘イサベルと結婚する。

ところが、ミクロネシアの領有権がスペインからドイツに移った3年後の明治34年、小弁を除いて日本人全員がトラック島から退去しなければならない事件が起こる。ドイツの官憲に、販売を禁止されている銃器と酒類の密売の嫌疑をかけられたのである。ドイツの商社の商売がうまくいくように、邪魔な日本の商社を体よく追い出したというわけである。

なぜ小弁だけが残留できたかはいまだに謎であるが、彼には現地人の妻がいたからだ

とか、独立して貿易業を営んでいた彼は日本の商社だけでなくドイツの商社とも契約していたからだ、といった説が出されている。

ここで少し私見を述べておこう。トラック島は母系出自集団が社会の基礎になっている。したがって、私の考えでは、小弁がウェノ島のイラス村の「首長」の娘と結婚していたので、ドイツ官憲がその親族集団やネットワークのなかの人々の不穏な動きを恐れたからではなかろうか。ドイツの官憲や商人たちは、小弁は島民支配や交易の役に立つと判断したのであろう。

もっとも、南洋貿易日置合資社はスペイン商人を仲介したり架空会社を作ったりして、グアムやサイパン、パラオなどで営業を続けるとともに、東カロリン諸島での営業許可を外務省を通じてドイツ政府に働きかけ、明治39年には再びトラックやボナペなどでの営業許可をえることに成功している。五年後には、またトラック島にも、日本の商社員が回ってくるようになったのであった。

森小弁はドイツや日本の商社を相手にコブラなどの商売をし続けた。大正3年(1914)、第一次世界大戦に参戦した日本がミクロネシアに海軍を派遣して占領したとき、明治25年(1892)にトラック島に下船してから数えると、22年間の歳月が流れていた。齢46になっていた。

4 「南洋」の登場

それでは、森小弁が南洋へと誘われていく背景には、どのようなことがあったのだろうか。

明治政府のなかで早い時期から「南進論」を唱えていたのは、榎本武揚であった。小笠原諸島の領有が確定し、本土からの植民にとりかかったのとはほぼ同じ明治9年、当時ロシア公使であった榎本は、失職した士族対策として、かれらを「南洋群島へ移され候……」といった南洋群島移民政策を述べた書簡を留守宅(妻)に送っている。さらにその翌年には、当時スペイン領であった小笠原の南方のマリアナ諸島(後の「南洋群島」の一部)を買収し、反乱士族の流刑地にするべきだ、との建議をする。西南の役が起こった年のことである。外国生活の体験が豊富でヨーロッパ諸国の事情に明るい榎本は、国内の諸問題、とりわけ士族の不満と人口増の問題を解消するための植民＝移民の地として、「南洋」の「開拓」にも野心を抱いていたのであった。

榎本の南進論は根深いものがあった。明治12年(1879)には、南方の地理や経済、自然等の情報をえるための「東京地学協会」を設立した。さらに明治13年(1880)には、青木周蔵が北ボルネオ(1888年に英国の保護領となる)の買収を建議したとき、これを支持した。鈴木經勲が、井上薫から与えられた帆船でミッドウェイ島やクリスマス島(ハワイ島)を巡歴、偶然発見した「硫黄島」の領有のための事業にも、積極的な役割を演じた。明治24年に、第一次松方内閣の外務大臣となると、かれは「植民協会」という移民行政のための団体を設立し、その会長に就任にしている。

明治政府が当初考えていた「移民」は、深刻化するインフレ、過剰人口、士族の不満を解消する方策として、労働力を必要としている海外の適当なところに人口を移すというものであった。この種の移民は、明治18年以降のハワイ官約移民であって、民間レベルでなされていた明治元年から始まるハワイなどへの移民の延長上に生まれたものであった。

ところが、榎本武揚が考えていた「植民」は、そうした単なる出稼ぎ労働者として一時的に海外に移民させて日本に送金させるというのではなく、そこに定住させて日

本民族の子孫を育て、日本人の海外発展の拠点とするという意味での定着永住型の移民（異国の地に日本人の種を植えて繁殖させるという意味での植民）であった。しかし、それがただちに日本がその地を政治的に支配する地域、つまり植民地の獲得に直結するものではなかった。したがって、その「植民」先の候補地域は、東南アジアからオセアニア、さらには南北両アメリカに及んでおり、ミクロネシア地域は、その候補地としての一角を占めるにすぎないものであった。

榎本は、外務大臣を経験したこともあって、海外から多くの情報を集めて適当な「植民」候補地を調査・検討し、その結果、メキシコがそうした移住地として最適と考えた。そして、たいへんな努力を払って資金を調達し、明治30年(1897)、メキシコに榎本植民団36名が送り込まれた。だが、榎本ら政府高官の「植民」計画は粗雑なものであった。それは荒野を開墾し商品価値のあるものを栽培して成功するというものであって、そこに待っているさまざまな困難への対処はほとんど考慮されていなかった。すなわち、移住先には、せいぜいが移住先の政府が見えていただけであって、移住者の日常生活の場に登場するであろうさまざまな困難や「他者」の存在に十分な配慮がなされていなかったものであった。このため、メキシコ榎本植民団は失敗に終わる。

5 「南洋」の表象と体験

明治十年代に、榎本武揚などの一部の政府高官のあいだで芽生えつつあった「南進論」の影響を受けて、民間人のあいだでも「南進論」が次第に形成されていった。そのような論調を形成するのに大きな力を発揮したのが、見逃されがちであるが、政府によって試みられた練習艦に民間人を便乗させて、実際に太平洋の島々についての見識を深めさせるという計画であった。この秀逸な計画を考え出したのも、幕府海軍出身の榎本武揚であつたらしい。

榎本武揚がマリアナ諸島の買収を建議した翌年の明治11年から20年前半にかけて、多くの民間人が遠洋練習航海の軍艦に便乗して、オーストラリア、ハワイ、フィジー、サモア、ミクロネシア、フィリピンを訪問した。たとえば、明治19年の練習艦「筑波」には、志賀重昂が、明治24年の「比叡」には、三宅雪嶺や富山駒吉、依岡省三などが乗り込んでいた。いったいどのような人物が毎年派遣された練習艦に便乗したのだろうか。その体験が彼らの人生にどのような影響をあたえたのだろうか（公刊されている日本海軍史料には、練習艦に便乗した民間人の乗船名簿は無いので、その全貌は未だ明らかになっていない。今後の課題といえるであろう）。

志賀重昂は明治20年に、明治期南進論の代表作と言われる『南洋時事』を著した。この著作のなかで、そのころから意識的に用いられ出した「南洋」を、「西洋」と「東洋」に比肩する概念として使用しようと試みた。志賀は巻末の自跋において次のように述べる。「南洋とは何ぞや。未だ世人が毫も注意を措かざる箇處なり。然れば予輩は南洋なる二文字を初めて諸君が面前に並出し、是れが注意を惹起せんとするものなり。南洋なる新物体と新話頭とを初めて捉へ来りし面目を自得するものなり」（原文カタカナ）。「南洋」という語が彼の造語であったとは思われない。というのは、すでに榎本武揚が明治九年に「南洋群島」という語を用いて、小笠原以南の広大な海域に散らばる島々を表現していることからわかるように、一部の政府高官や知識人の間には用いられていたらしいからである。しかし、ここに至って、「南洋」という語が、近代日本人の前に、それを支える体験を背景にしながらある一定の具体的イメージをともなって多くの人々の生活に登場してきたのである。

もっとも、そこに語られている「南洋」ないし「南洋諸島」は、ミクロネシアのクサエ島、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー島、サモア島、ハワイ島といった志賀が歴訪した島々のすべてであり、さらにはその訪問地域・海域のすべてであった。志賀は、この本のなかで、この地域が日本の貿易の相手や移民先として将来無視できない地域になるだろうと予想し、興味深いことに、「生物学者」を派遣してその地域の生物を調査させ、「人種学者」（人類学者）には「南洋土人の遷徙の事跡」を、「社会学者」にはその衣食住や風俗、開化の程度を調査させるべきだ、と提言している。また、当時スペインの領有であったミクロネシア・カロリン諸島のクサエ島（現在のミクロネシア連邦コシャエ州）に寄港した時の印象と体験を、およそ次のように記している。この島の「土人」は、スペイン領であるにもかかわらず、34年前に来島した米国宣教師の教化によって、米国の付属の島のように思っていて、米国旗を所有しているものもいる。この島の土人二人と面談し、スペイン、ドイツ、アメリカのうちのどの国が一番好きか、質問したところ、島民に対してもっとも親愛なる者が一番だ、というもっともな答えを述べていた。また、その一人が、最近、ドイツの軍艦がこの島に寄港したことを知り、ドイツもこの島に手を染めようとしているらしいことがわかった、等々。

この『南洋時事』刊行以後、明治20年代には、いくつもの「南洋論」「南進論」に関する著作が出版されることになった。矢野暢は、『日本の南洋史観』において、明治期の「南進論」者の代表を七人ほど選び出し、その代表作とともに紹介している。まず志賀重昂『南洋時事』（明治20年）がその最初に挙げられる。ついで服部徹『日本之南洋』（明治21年）、菅沼貞風『新日本の図 南の夢』（明治21年）、田口卯吉『南洋経略論』（明治23年）、服部徹『南洋策——名南洋貿易及び植民』（明治24年）、稲垣満次郎『東方策』（明治24年）、鈴木經勲『南洋探検実記』（明治25年）、稲垣満次郎『東方策結論草案』（明治25年）、鈴木經勲『南洋巡航記』（明治26年）、鈴木經勲『南洋風物誌』（明治26年）、竹越與三郎『南国記』（明治43年）。

このうち、鈴木經勲の『南洋探検実記』は、明治17年、外務卿井上馨の命を受けた後藤猛太郎と鈴木經勲が、英国捕鯨船エーダ号で、ミクロネシアのマーシャル諸島に派遣された際の民族誌的色彩の強い記録である。二人に課せられた任務は、日本人水夫がマーシャル諸島のある島で島民に虐殺されたというエーダ号船長の報告を確かめ、事実ならば現地の人から謝罪を得てくることであった。この航海でミクロネシア人四名を日本に同行したという（横浜で客死）。民族学者の高山純は、かれらのマーシャル行きはまったくのでっち上げであったと多くの資料を用いて推測している。したがって、慎重に扱わねばならない資料であるが、もし本当たとすれば、これは記録上では最初のミクロネシア人の日本訪問記録ということになる。しかし、高山の考察が正しければ、日本近代の南洋史に関する記述は大幅に修正を余儀なくされるだろう。

また、服部徹の『南洋策』は、列強に先んじて「無主の地」状態の島々を領土化して植民をせよという過激な書で、ここで指示されている「南洋」はフィリピンとミクロネシアに限定され、後者の地域はドイツが支配下におこうとしているので、それに先んじて占有しなければならないこと、そこに送り込む植民者は品行方正・精神不拔の者でなければならないこと、「土蕃」（先住民）に対しては「豪傑なる植民隊と宗教者、仁術家、教育家」などを派遣し、「務めて威を示し之れを服せしめ、以て漸次に土蕃を教化服従せしむる」ということ、さしあたって経略すべき島は、マリアナ諸島のグアムやロタ、カロリン諸島のヤップやポナペ、マーシャル諸島のヤルート、ギルバート諸島などの合計十二の島に限ること、といったことを提言している。

矢野 はまた、明治二十年代には、こうした「南洋論」の相次ぐ出版や政治的な不満を抱く民権論インテリの多い改進黨系の作家たちに、「南洋」を舞台にした政治小説がたくさん書かれたことを指摘する。日本で夢破れた者が、南洋に雄飛し、そこで英雄的な活躍をして、理想の楽土を建設するといった内容の小説である。いいかえれば、「南洋」にわたって、そこで「王」になる夢が描きこまれた小説といってもいかもしれない。紙上のことであるが、きわめて素朴な侵略主義的な思想がそこには見出される。

明治二十年代、政治家、その影響を受けた民間の経済人・知識人、そしてやはり政治家の影響を受けた作家たちが、体験をも交えて、植民・移住の地として、貿易・開拓の地としての「南洋」のイメージを描き出し始めていた。それは冒険心をかき立てる波瀾万丈の地であり、「野蛮な土人」（土蕃）が住んでいるが、それを教化服従させれば楽土ともなりうる地として作り上げていったのであった。

一部の日本人の間ではあったが、こうした「南洋」のイメージがそれなりの輪郭をもったものとして形成されつつあった。すなわち、「南洋」はスペインなどに領有されていることになっていたが、なおこの広大な海域にはまだ「発見」されていない「無主の地」がある可能性があり、またたとえ地図上の領有がはっきりしていたとしても、実質的な支配が及んでいない島々があって、それをドイツのような後発の「列強」が支配下に収めようとしきりに活動している、というような状況をふまえて、これに早急に対処しなければ、植民地にする機を逸してしまう——そうした地域として思い描かれていたのである。それとともに、その地域が、たとえ他国の支配地域であっても、相手国の承認を得て平和なかたちで日本人をその地域の開発のために移民させたり貿易をしたりする有望な地域として浮上してきた、ということでもあった。

しかし、そのように表象されはじめた「南洋」であったが、明治31年(1898)に、ドイツがミクロネシアを領有し、アメリカがフィリピンとグアムを領有することが国際的に承認されたことによって、政治家の関心を失い、ほとんどの人々の意識からいったん遠ざかってしまう。「植民」に熱心であった榎本武揚も南米に関心を注ぎ、南洋への関心を失っていった。もはや「無住の地」の発見や領有の確定していない島がもはや期待できず、統治国に気づかれずに大規模な移民を可能にするような島の可能性がなくなってしまったからであった。

それが再び蘇ってくるのは、国家レベルでの具体的な植民の対象地域になり、それをふまえた大規模な交易地域と隣ってくるのは、大正3年(1914)第一次世界大戦を契機にした占領し、国際連盟委任統治領として統治するようになって以降のことであった。

6 ミニ商社の興亡——ミクロネシアとの交易・交流の開始

ところで、こうした日本在住の一部の人々のあいだで形成された初期「南洋」表象が、中央の政治家や知識人たちのあいだからやがて消滅していったにもかかわらず、その一方で、そうした人々が描き出した「南洋」表象の影響を受け、小笠原諸島の向こう側に点在するミクロネシアに雄飛していった少数の日本人がいた。「雄飛」といった字句を並べれば聞こえがいいが、彼らを待っていたミクロネシアの現実、苦労の連続であったはずである。

彼らの心の奥底にはそれぞれの「夢」や「思惑」があった。ただちにそれを実現させることはできない。したがって、表面的には、かれらが行ったことは、ミクロネシア地域で交易活動に従事することであった。

日本人がミクロネシアにわたったもっとも古い記録は、文政4年(1821)に、南部藩

領から江戸へ向かう途中で漂流した神社丸の乗組員の、ミクロネシアのペラウ（パラオ）島への漂着である。ついで漂流した船から助け出された土佐の漁民中浜（ジョン）万次郎が、捕鯨船の乗組員となって、天保13年（1842）にギルバート諸島やグアム島に立ち寄っている。

明治元年には外国人に雇われるかたちで、グアムに出稼ぎにいった人たちもいた。そして、上述のマーシャル諸島での日本人漂着民殺害事件の調査のために派遣された鈴木経勲と後藤猛太郎の二人、さらに練習艦筑波でクサエ島に立ち寄った志賀重昂などがいた。そうした訪問者に続くことになったのが、水谷信六（新六）である。

『南洋貿易五十年史』によれば、彼は小笠原に移住した者の一人で、45トンという小さな帆船「相陽丸」でスペインの許可を得ることなくボナペに渡り、スペインの官憲に見つかって取り調べを受け、密貿易者であることがわかってしまったが、あまりに小さな船だったので、商売をすることなく帰国せよ、ということで許されたという。その帰途、ピングラップやモキール島に立ち寄って商売をしたらしい。「当時小笠原には南洋群島の土民で帰化している者が幾人かあった。水谷はその帰化人から南洋群島の話聞き、群島遠征の冒険を思い立ったのであった」（『南洋貿易五十年史』）。

注意したいのは、ここで言われている「帰化した土人」は、マリアナ諸島の先住民の子孫である「チャモロ人」やカロリン諸島の先住民である「カナカ人」ではないということである。おそらく、ハワイ経由で小笠原に渡ってきていた「ヨーロッパ人」のことであろう。田中弘之は『幕末の小笠原』のなかで、日本が明治8年に小笠原を再回収を計画した明治6年4月に、ペリーが小笠原に寄港して調査をしたことを根拠に、小笠原がアメリカの領土であることを東京まで船でやってきてアメリカ公使に訴えたという、ベンジャミン・ピースという人物に触れている。彼は小笠原の支配者になることをもくろんでいた島でも評判の悪い男で、田中のよれば「小型の帆船で南洋の島々を巡って、原住民や入植者を相手に商売をしていた」という（翌年死亡。殺されたとも言われている）。

日本に帰化したヨーロッパ人入植者たちのなかに、このピースと同様、南洋を巡って商売をする者がいて、水谷はその真似をしたのであろう。水谷が用意した商品は、ランプ、石油、ビスケット、蚊帳、米、メリケン粉、シャツ、マッチ、牛刀などであったという。『南洋貿易五十年史』の冒頭にこの話が語られているように、これが日本とミクロネシアとのあいだの最初の交易ということになっている。あまり知られていないが、水谷は南鳥島を発見した人物でもあり、明治34年には水谷村ができるまでになった。

この水谷から、南洋との貿易が有利であるという話を聞いたのが、やはり土佐出身で小笠原で牧畜をしていた依岡省三であった（依岡は、後の明治24年に、練習艦「比叡」で、ミクロネシア、フィリピン、オーストラリアをまわっている人物である）。依岡は、上京した折に、早稲田専門学校の経済学者の宇川盛三郎に話し、これが田口卯吉にも伝わった。田口は、明治12年に『東京経済雑誌』を創刊し、その社長兼主筆として健筆を揮うとともに、政界から経済界、さらに歴史学などにも多くの業績を残し、後には衆議院議員を勤めた人物である。

かれはこの話を聞いて、当時大きな社会問題になっていた土族問題を解決するために南洋の開拓・貿易に興味を抱き、非難を受けながらも土族授産金を利用して、明治23年に「南島商会」を設立した。「南洋経略論」（『東京経済雑誌』掲載）は、このときに書かれた小さなアジビラのような文章である。そして、スクナー型帆船「天祐丸」を購入し、田口みづからこの天佑丸に乗って「南島」を足掛け八ヶ月かけてまわったので

ある。天佑丸は、グアム、ヤップ、ポナペ、パラオを訪問し、ポナペに「南島商会」の支店を置くことにする。一行のなかから支店長として事務補佐として乗っていた松永一太郎が、事務員として関根仙太郎が配置された。この航海中、水夫の一人が脚気の悪化でポナペで死亡している。ポナペに支店員として残された二人の心境は推して知ることができるであろう。

この「南島商会」は航海終了後、すぐに解散してしまう。田口は実際にミクロネシアを視察して、その後も南洋の重要性を説きはしたものの、それほど大きな益をもたらすものではないと判断したのだろう。

この「南島商会」の財産を買い取ったのが肥前島原出身の小美田利義で、かれは「南島商会」を「一屋商会」として再出発させ、天佑丸は数度に渡るポナペへの航海を行っている。松永と関根の旧南島商会ポナペ支店員はそのまま「一屋商会」のポナペ支店となった。だが、明治26年にこの「一屋商会」も解散に追い込まれる。初期の南洋貿易は、机上のようにはいかず、つまり、初期「南洋」表象とは裏腹に、苦難の道を歩まされていたのであった。この時期、「南洋」がまだ不安定な用語であったことは、田口が「南洋」とともに「南島」という用語も用いられていることにも示されている。

「南島商会」設立に刺激されて、水谷信六は「快通社」を設立しトラック島に支店を、横尾東作は「恒信社」を設立してパラオ島に支店を設けて活動していた。「一屋商会」解散後、その社員が和歌山県日置村の素封家の援助を得て、さらにミニ商社を吸収して、明治26年、「南洋貿易日置合資会社」を設立し、しばらくは成功を収める。

しかしながら、明治31年に、ミクロネシアがスペインからドイツの領有ということになると、ドイツの官憲の干渉・妨害によって、明治41年、商売がうまくいかなくなり、明治34年に、やはりミクロネシアで貿易を行っていた南洋貿易村山合名会社と合併し、「南洋貿易株式会社」に衣替えをすることになる。これがやがて委任統治領「南洋群島」時代に大いに栄えた貿易会社である。

ポナペに「南洋商会」や「一屋商会」の支店員の松永や関根たち、「快通社」のトラック支店員となった安田某や竹井武六といった人たち、「恒信社」のパラオ支店長になった関勘四郎たち。これらの人たちは、次の船が来るまで交易品となるものを買付けるといふ仕事を行っていた現地駐在員であった。彼らの商売の相手は、宣教師や入植者だけではなく、先住民たちも含められていた。彼らは否が応もなく、この熱帯の生活に適応していかなければならなかった。そのような一人に、森小弁がいたのであった。

いったい、こうした駐在員が抱いていた「南洋観」、「先住民観」はどのようなものであったのだろうか。いったいどのような思いを抱いて、遠く離れたミクロネシアまで来る気になったのだろうか。実に興味深いこうした問いに十分に答えてくれる研究も記録もほとんど残されていない。いや、どこかにあるのかもしれないのだが、まだそうした研究がすすんでいないというべきかもしれない。

7 南洋の「王」を夢見る

南洋の渡った「壮士」たちは、その地でそのような生活・体験をしたのだろうか。幸いにも、森小弁に関する記録はかなり残っている。だが、彼自身が自らの気持ちを赤裸々に吐露したような書き物はほとんどない。森小弁の六男六郎氏によれば、小弁は日記をつけていた。幼いときにその日記を盗み見た記憶があるという。しかし、家族が敗戦直後にその他の書類とともに焼却してしまったらしく、現存していない。したがって、彼の内面を詳しく知ることができない。いったい彼は「南洋」をどのように考えて

いたのであらうか。どのように体験していたのだろうか。

森小弁と「南洋群島」との関係をも、もう少し詳しく考えてみよう。

まず、天佑丸で南洋群島に渡るまでの時期の小弁を検討してみよう。これは、書物や周囲の人たちからの見聞・伝聞によって「南洋」に関する関心が芽生えた時期に当たる。小弁は、東京専門学校中に、矢野龍渓の南洋を舞台にした政治小説『浮城物語』を読んで、若い血を踊らされたという。これは、日本人が「浮城」つまり軍艦を大いなる手段として世界に蹂躪し日本の幾十倍もの支配地を獲得し、それを天皇陛下に献じるという理想が語られている空想的な政治的(・侵略主義的)海洋冒険小説である。

そのなかで、南方雄飛の計略をもった作良先生という人物が、同志を募る演説のなかに、次のような言葉がある。「……人生朝露の如し、仮令ひ蜻蛉州の一隅に退縮して、黄老養生の道を求むるも、あに能く百歳の壽を超んや、骨を埋める青山は到处にあり、世界何の辺か墳墓の地ならん。……我々今將に全地球を蹂躪して無人の地を席卷し、日本に幾十倍するの大版図を拓て、以て之を陛下に献じ、我々請て其地を鎮せんとす。若し不幸にして日本の国力之を所有するに勝へんずんば、我々諸君と与に其地の王たらん……」。ここに見える、南洋を経略するための手段としての南洋貿易の展開という構図は、森小弁の南洋行と酷似している。また、そこには、こんな言葉も見ている。「諸君或は謂はん、南洋諸島最も略有すべき地多しと」。

1932年(昭和7年)、当時の南洋群島トラック支庁長山本繁蔵は、自身の在南洋十年の記念として『南洋群島トラック 実業界の面影』というトラック支庁内の日本人実業家たちの来歴を記録した本を発行した。その冒頭に、森小弁(右手を事故で失ったので、毛号を左拳といった)の「述懐」と題する漢詩が寄せられている。これに付されたその詩の注釈(おそらく、小弁自身によるものであらう)は、次の通りになっている。小弁が自らの心境を語った貴重な記録である。

此の南北太平洋の広々としたる太平には無数の島嶼がある。嘗ては彼の豊臣秀吉は韓国に兵を起し事成ばならずして卒し、又原田孫七郎も奇策用ひる処なく封侯万里の名を空ふせし事、寔に痛恨の至りである。遠国と親交を結び、近国を攻め取り祖国の領土拡張の策を何処に用ひんや、試みに南方豪州に向ひ活眼を開き視よ、沖縄よりマリアナ、カロリン、ニウグイニア、ニウブリテンと無数の宝庫は綺羅星の如く、又庭石を踏んで行くが如く、点々として在るではないか、天公は此好き版図を、吾人の取るに任せ居るにあらずや、自分は斯る希望を以て祖国を辞して来たのである。卒先其衡に当らば多少共後進に資する事なしとせず、仮令身を魚腹に葬り、また祖先と墳墓を異にする事は、覚悟の事である。

もしここで述べられていることが本音であつたならば、小弁は矢野龍渓の小説に鼓舞されて、自分もまた小説の主人公たちと同じようなことを現実の世界でしてみようとの決意で、たった一人でトラックに渡ってきたのであつた。小弁は本気で、原住民を支配下において、自分が南洋の「王」になり、その領土を陛下に献上するという夢を抱いていたのであつた。

能仲文夫『赤道を背にして』は、昭和8年に三ヶ月あまりをかけて南洋群島各地を旅した当時のジャーナリストの旅行記であるが、そのなかにトラック島を訪問したさいの簡単な面談記録を「島の大酋長日本人森の話」と題して載せている。

……「明治二十四年スペイン時代に渡島しました……」と森氏はポツリポツリと語り出した、その話を終わりまで聞いた私は、これは素晴らしい海外雄飛者の自叙伝小説になるゾと思った。彼は明治二十四年の春備前長船の一刀とピストル一挺をもってこの夏島に乗り込んできたのであった、貿易をして巨万の金を拾ってやろう、そしてカナカを征服して群島の王様になってやろうと、素晴らしく大きな野心を抱いていたのであった。そして貿易するのだと云ってはカナカの若者を従えて島々へ遠征し機への至るのを狙っていた。島民を征服するのは飛道具でなければ駄目だと考えた彼は日本から密に鉄砲を取り寄せ先づ試験にとライカンに火薬を詰めていた時、火薬に火が点火して轟き渡る爆音と共に右腕は根元から吹っ飛んでしまったのだ、そう云う訳で……わしは……と彼は右の義手をさすりさすり更に話つづけた……。

こうした野望はあったものの、彼には強力な軍隊がつき従っていたわけではない。彼はたった一人で、武器といえば日本刀一振りと短銃一丁だけという装備で、トラック島をまずは征服しようということの上陸したのである。現実はその通りにはいかなかった。武力という点でもトラック人は、これで征服されるほど弱体な人々であったわけではなかったのである。

8 トラック社会への参入——商人として、軍師として

森小弁はトラック島にやって来た時期から、ドイツに施政が移り森小弁を除いてトラック諸島から一時期日本人が撤退するまで、細々と変転を重ねるミニ商社と契約しながら貿易業を営んでいた。来島当初は「南洋の王」になるのだと密かに思っていた小弁も、交易をするには現地の人たちと友好的につき合わなければならないし、日本から持ち込んだ自家用の食料その他の品物が無くなってくれば現地の食生活に適応をしなければならなくなったはずである。なによりもまず、自分の命や現地で集めたコブラなどの交易品を盗難から守るためには、必然的に現地の有力者の保護が必要であった。しかも、トラック人たちにとって、小弁は「異人」であり、好ましくない存在だとみなせば、すぐにでも殺害できる立場にあった。

トラック諸島の住民は、伝統的にトラック諸島の全域を支配する「王」のような存在を戴いたことがなく、当時も戦国時代のような状況にあり、島同士、村落同士の戦争を繰り返していた。捕鯨船の船員たちのあいだでも、トラック諸島は近づく者を容赦なく攻撃する戦闘的な住民がいることで知られていて、長い間、この島への寄港は避けられていた。

トラック諸島のウェノ島に初めての西洋人（アメリカの宣教師）が上陸したのが、1884年のことである。森小弁がこの島にやって来たのが1892年であるから、ほんの十年足らず前のことであった。戦国時代であるということは、青年男子のほとんどが「戦士」であるということをも意味する。そのような社会のなかに、小弁はたった一人で入っていったのである。トラック諸島では、文明人との接触が始まってからは、棍棒と槍、投石というこれまでの武器に加えて、ドイツの商人などを通じて銃火機類も島民のなかに入り込みつつあった。その一翼を森小弁も担ったわけである。

森小弁が、内心でウェノ島（旧春島）が「南洋の王」になるための出発点となるための手頃な島だと判断したとしても、実際には小弁が島に上陸して住むためには、上陸地域のイラス村の「サモル」（首長）の許可が必要であり、その保護なしでは生活しては

いけなかった。私の調査では、イラス村のサモルは昔からプールと呼ばれる母系氏族から出すことになっていた。日本の商社やヨーロッパの宣教師が貿易や布教活動を行うためには、このサモルの承認が必要であった。このため、彼もまたイラス村のサモルの保護を受けざるをえなかったのである。

日本時代になって、南洋庁トラック支庁や日本人町が、隣のトノワス島（旧夏島）に設けられるまで、このウェノ島が「外国人」に対して友好的な態度で臨んだ最初の島であったので、外国船の寄港地となっていたのである。つまり、トラック島で最初に外国人に「開港」したのが、この島であったのだ。ついでに述べると、日本の敗戦後、アメリカの統治時代に入ると、再びこのウェノ島に米国信託統治領のトラック支庁が設置されて、いわばトラック諸島の首都の位置を占め、現在でも外国船や航空機の寄港地となっている。

小弁は表面的には日本の商社の現地駐在員として、日用雑貨品を売りコブラを買い集めていた。もちろん物々交換である。しかし、彼にはもう一つの顔があった。戦国時代のトラックを生きるイラスのサモルが彼に求めた「軍事顧問」としての顔である。サモルは日本から銃器などを輸入する窓口になってもらおうとしたのであろう。小弁をはじめとする日本人たちがどれだけの量の銃器をトラックに持ち込んだのかは不明であるが、ヨーロッパ人や日本人との交流が始まったことでかなりの量の銃器類がトラック社会に入り込み、トラック諸島内の権力抗争に大きな影響をもたらしたことはたしかである。森小弁の子孫たちのあいだでも、小弁がイラスのサモルの信任を得ることができたのは、武器の威力・調達にあったらしい、ということを私に語っていた。

横田武は、次のように記している。「生活のレベルを島民にまで下げ、彼等と語り彼らと楽しむ心のゆとりが出来てから、小弁は始めて南洋が第二の故郷たるを感じた。そして懸命の努力を以て漸次自分の地盤を開拓して行った。其の頃島には独逸の商人が四名居て、小弁と同じ様にコブラや椰子油を買い集め、その勢力は大したものであったが、村田銃が発明されてからは小弁の勢力が断然頭角を現わすに至った。前にも述べた通り、島民は闘争に日を暮らしていたので、独逸の銃器を手に入れる為に独逸商人の云いなりになっていたが、我が国に村田銃が出来てずっと安く購入出来るようになると、島民は一斉に邦人に好意を寄せ、在留同胞の商売は大繁盛となった」。

もっとも、こうした強力な武器の所有と売買は、彼らの島民に対する脅威や威信を増すだけではなく、命を脅かす危険性も増やしたはずである。

9 心境の変化——トラック人との結婚

トラック島に住み着いた森小弁に、やがて大きな心境の変化が起きることになる。そのことは、トラック社会のなかにとけ込み、トラック人と同様の食物を食べ、彼ら戦士たちと共に戦い、そしてイラスの長老たちの信頼を得て、彼らの社会組織のなかに擬制的なかたちで組み込まれ、やがてサモルの勧めで、サモルの「娘」イザベラを妻に迎えることになった経緯から推測することができる。能仲文夫は上述の面談記で、この現地妻の獲得の事情を、「……依然として土人の反乱は益々激しかったので、森は白井と相談の結果夫々島で最も勢力のある酋長の娘を妻にしようと考えた。さすれば身の危険が幾分なりとも緩和されると思ったからである。そして森は水曜島の酋長チャウラの娘イザベラを、白井は春島の酋長の妹を夫々妻にした。当時森老は廿九才、イザベラは十一才であった」と記している。水曜島の某村はポンナップ環礁タマタム島から移住してきた人々の村で、その酋長氏族はエレゲータウであった。

ところで、仲能文夫は「水曜島の酋長チャアウラの娘」であるイザベラを娶ったと記し、これに対して、横田武によれば、「春島イラス村酋長の娘イサベラ」を娶ったという。文献と現地取材とで詳細な森小弁の伝記を書いた高知新聞記者森沢孝道も、小弁は「ウェノ島（春島）イラス村のサモル（酋長）マヌッピスの娘イサベラを娶った」と記している。小弁の妻がイサベラ（日本名伊佐）であることは間違いないが、彼女の父の名前ははっきりしない。これには理由がある。トラック社会は母系社会で類別親族名称を用いているので、「父」といっても日本社会のような原則として父が一人というのではなく、「父」がたくさんいるからである。森六郎によれば、イサベラは実父が早く死んだので実母の姉妹たちとその一族によって育てられたという。妻方居住婚制が一般的であるので、これはきわめて当たり前のことであった。

イサベラの父がマヌッピスであるか、それともチャアウラであるかはさておき、能仲も森沢も、森小弁は酋長の娘の夫だからやがて島の酋長になった、といった理解をしている。とくに森沢の場合は、母系社会だから酋長職を世襲したと述べている。しかし、これは明らかに誤りである。母系社会であるトラックでは娘婿に酋長職を譲ることはできない。この社会では母が酋長氏族の者でない限り、酋長職を継承することはできないのである。酋長職は同じ母系氏族の男たちに移譲され実の娘や息子は同じ母系一族ではないので移譲されることはけっしてない。まして娘婿に移譲することなどとんでもないことであった。

したがって、もし小弁がトラックの社会の政治・社会組織に明るかったならば、そしてサモルに相当するような権力をもった地位についたとするならば、彼は酋長の姉妹の「娘」と結婚したのであろう。そうすれば、小弁の息子たちが将来において運が良ければ、サモルになる可能性があり、そのようなことから、小弁も、酋長氏族のなかで強い発言権をもてるようになれるからである。その点からすれば、事実であるかどうかは別にして、島民の女性を妻にするならば、森小弁よりも彼の友人の白井孫平の方が戦略的であったといえる。ピーティーも「彼女は彼にミクロネシアの環境を理解し評価する知識を提供し、そして森は彼女を通じてトラック語に堪能となり、トラックの習慣に適応し、島島に住むトラック人たちとの友好関係を織りあげていったのである」と述べている。

小弁はこの社会の仕組みと現状を知れば知るほど、わずかな日本人の力では当初の野望を実現できないばかりか、この社会の仕組みを利用しなければ自分たちの身を守ることが難しく、またそうすればするほどますます「トラック諸島の王」になれなくなっていくということであった。つまり、徹底した武力弾圧を加えてこの社会の社会構造を解体させなければ「王」にはなれないのである。あるいは小弁の一族だけがそのような原理から超越した集団にならなければならないわけである。

小弁は来島初期は、果敢の島内のあるいは島同士の戦闘に参加し、軍事顧問としての評価を得て、機会があれば実力で島の「王」になることを考えていたにちがいない。数少ないミニ商社の駐在員仲間と、そんな夢を語り合っていた。だが、その夢は現実の前に打ち砕かれてしまうのだ。まず、明治29年2月、日本人仲間の一人が銃器を奪い取ろうとしたバラム島のサモルの手にかかって殺害されるという事件が発生する。さらに、同じ年、小弁自身が銃器の手入れをしていたときに火薬が爆発して右手を失うという不幸に見舞われる。

これを境に、小弁の心境に変化が生じたい。自身が暴力を背景に「王」になるのではなく、彼の子孫がトラック島で「繁栄」することを望むようになったのであろう。

彼の漢詩「述懷」の末尾の句、「卒先其衡に当らば多少共後進に資する事なしとせず、仮令身を魚腹に葬り、また祖先と墳墓を異にする事は、覚悟の事である」は、この辺りのことを物語っているのかもしれない。

10 夢醒めて現実を生きる

日本では、あの「南洋」への関心は、とりわけ南洋群島への関心は、もうほとんど消え失せていた。小弁の境遇は、潮が引いて海岸に取り残された小さな魚のようであった。「身を魚腹に葬り、また祖先と墳墓を異にする」事態が、現実のことになっていた。

日本人の姿がトラック島から姿を消し、森小弁のみが妻イザベラとその一族に保護されながら、子供を生み、ドイツの商人を相手にコプラに仲買い商を営み、現地社会の一員になって生きなければならなかった。この時期、彼はもう二度と日本には戻ることなく、日本人としてではなくトラック人として生きていようとしていたのではなかろうか。小弁は結婚を機に、妻の親族を頼って、ウェノ島（旧春島）からトール島（旧水曜島）に転居している。トラック島の婚姻規則である妻方居住方式に従ったのである。

1914年（大正3年）のある日、トラック島に日本の軍艦が突如姿を現した。その時の驚きと感激を、彼は次のように語っている。「私は日本の軍艦が来たと聞いて、海岸に走り出て、あの深紅の軍艦旗を青い生海の上に見た時、砂の上に坐っていつまでもいつまでも泣き続けましたよ。そして長い間、自分が住んだ島が、日本のものになったのは本当なのかうそなのか。ここへ海軍軍政本部が設けられるまでは疑ったくらいです」。

私がかつとも興味を抱いているのは、たった一人でトラック島にとどまっていたこの時代の小弁の生活であり心境である。その間、彼はやがてこの地が日本の統治領になるなどとは思わずに生活していたのである。だが、これまでの『夢は赤道に』などの伝記類にもほとんど記述されていない。

森正隆（太郎の長男）やいまは亡き長男の三郎、あるいは六郎といった森小弁の子孫の記憶から浮かび上がってくる小弁の性格や生活ぶり、トラックで生活し現地の妻を迎えても、徹底してその家族生活は日本人のそれであったということである。子どもたちはトラック人ではなく日本を立派に話せる日本人として育てられたのである。箸を使って食事をし、パンの実やタロイモなども自分が食べやすいように工夫して食べ、もちろんドイツ統治時代には入手が困難であったであろうが、日本時代には味噌汁や漬け物も欠かさず用意させていたという。

さらに、森小弁の生活方針を物語るのが婚姻によって生じた母系氏族との関係である。森小弁は、身の安全を確保し、土地の入手やドイツ人相手の交易のための品物の調達などにおいて、母系親族を大いに利用した。しかし、その一方では、この母系氏族の原理を無視し、日本的な父系的家族制、いかえれば長男相続的な家族形態をトラック社会のなかで実現していったのである。したがって、現在では、森ファミリーでは、夫方居住婚が採用され、婚入してくる妻の所属する氏族の存在や役割はあまり考慮されない。小弁の子孫は自分の母や配偶者の氏族名さえも知らないほどである。つまり、小弁はトラック島に小さな「日本社会」を作り出していったのである。私の想像では、もっとも苦難の多かったこの時期つまり日本海軍の南洋群島占領以前の時期こそ、多くの子供にも恵まれ、人生においてももっとも充実していた平和で幸せな時期だったかに思われてならない。

森小弁は「南洋群島」と呼ばれて日本に統治されていた時代もずっとトラック島に

住み続け、敗戦によって日本の統治が終了した年の昭和20年8月20日、トラック島で亡くなった。終戦の詔がラジオから流れたとき、小弁はすでに意識不明になっていたという。享年75歳。

森正隆氏や森六郎氏によれば、森小弁は自分が日本の侍の子孫であることを自負し、トラック島にたった一人で残留したときに歓喜した日露戦争の英雄乃木將軍を、終生にわたって尊敬していたという。

この小弁が『冒険ダン吉』のモデルだとする説が日本で流布したことがあった。しかし、そのようにして森小弁が日本人の多くに見出されるのは、戦後のことであり、日本が経済的に再び海外雄飛に向かい出してからのことである。

補論 「南洋」以前——「帝国の南門」の成立

私たちはつねに「自己」というものを確立していくために「他者」を必要としている。これは「個人」のレベルだけではなく、さまざまな「集団」や「地域」が自分たちの「集団」や「地域」を認識・確立している場合でも、同様である。

「明治国家」が「近代国家」としての自覚をもって立ち上がってくるためには、「他者」を必要としていた。いうまでもなく、この「他者」の筆頭に位置するのは「西洋列強」であり、むしろ「近代日本」は「西洋」という「他者」によってなかば強制的に立ち上がらされたといっても過言ではない。「他者」としての「西洋」という構図は、幕末・明治時代から現代に至るまで基本的に変わっていない。

しかし、日本が「近代国家」として立ち上がっていく過程で、やがて「東洋」とも「西洋」とも異なる新たな「他者」に出会うことになった。「日本人」はそれを知的に把握しようと試み、あるいは身体を賭して体験し、ときにはそれと戦い、さらには植民地化を媒介に、自己の世界のなかに取り込んでいった。その一つが「南洋」という存在であり、その表象（その語とそれにともなった形成されたイメージ群）であった。

いつごろから、「南洋」という語が、近代の日本人の間に、より正確に言えば日本の政治家や知識人層の言説のなかに登場してきたのだろうか。その決定的な契機・前提となったのは小笠原の領有問題であった。

近代の日本人が、いわゆる「日本」（後に「内地」といわれる地域）の「南方域」に関心をもち、接触し、そしてやがて日本に取り込んでいく最初の段階に位置づけることができる出来事は、明治7年の「台湾出兵」（征台の役）であった。台湾に漂着した琉球の漁民四名が原住民に殺された事件の謝罪を中国に対して求めるために、日本が台湾に軍隊を派遣した事件で、近代国家日本の初めての海外派兵である。これによって日本政府は台湾を領有していると主張していた清国政府から多額の賠償金を得ることになった。それから二年後の明治8年に、小笠原諸島の領有が宣言される。さらに、それから四年後の明治12年には、形式的には独立した王国であった琉球が「沖縄県」として日本に組み込まれることになる。いわゆる「琉球処分」である。

小笠原と沖縄の二つの地域は、明らかに「日本」（本土・内地）の南方に位置している。しかし、これらの地域は「南地」とか「南島」ないしそれに類する語で呼ばれることはあっても、ほとんどの場合、「南洋」という言葉で表象される地域には含まれることはなかった。「南洋」は小笠原や沖縄の向こう側に想定された地域であった。

「南洋」という表象が日本のなか形成される背景となったのは、発足間もない明治政府・支配階層を悩ませていた国内の過剰人口問題にあった。当初、剰余人口を北海道の開拓にあてることを考えていた。だが、指導者層に、世界的レベルでの地理的、政治

的、社会的状況が次第に理解されてくるに及んで、ハワイやメキシコ、アメリカ、東南アジア、さらにはオーストラリアその他への太平洋の島々への関心が芽生えてきた。

しかし、指導者層の意識のなかに登場してきた「南洋」とは、移民・植民の対象地域になりうるかもしれない「南方地域」といった、ぼんやりとしたそして広大な領域にすぎなかった。それがより輪郭をもった領域となってくることになった契機が、先に触れた小笠原諸島の領有問題の国際的決着であったわけである。以下では、主として田中弘之『幕末の小笠原』によりながら、「南洋」登場前史を形成する、幕末から明治になって日本の領土として国際的に承認を受けることになるまでの小笠原の歴史を見ておこう。

小笠原諸島はもともとは無人島であった。寛文10年(1670)阿波国の勘左衛門の持船が漂着したことで発見され、この報告を聞いた幕府が、五年後の延宝3年(1675)に探検船を派遣し、島の地図を作成し、その位置を明らかにした。ヨーロッパには、この島のことが早くから伝えられていた。この漂着による無人島の発見の情報が、1727年にヨーロッパで刊行されたケンペルの『日本誌』で紹介され、さらに天明5年(1785)刊行の、地図入りで「むじんじま」とか「小笠原島」として記載された林子平『三国通覧図説』もヨーロッパに紹介されていたからである。この事実が、その後、小笠原が移住・開拓がなされないまま放置されていたにもかかわらず、近代になって日本がその領有を国際的に認めさせる根拠になったのであった。

江戸から洋上はるか彼方の小笠原諸島は、日本にとってはほとんど益するものがない無人島にすぎなかった。林子平はオランダの植民論に刺激されて、将来植民する可能性をふまえて日本の無人島に関する上述の書を著したのだが、幕府では、この無人島がヨーロッパにとって政治的にも経済的にも重要な意味をもっている地であるということに気づく者はいなかった。そのことにやっと気づくのは、日米修好条約締結後、幕府の外国掛目付衆が、ペリーが1856年(安政3)にワシントンで出版した『ペリー提督日本遠征記』をいち早く入手し、その内容を検討しているときであった。ペリーは、その著で、小笠原諸島が太平洋行路の中継地点としての小笠原諸島の重要性を説いていた。

しかも、このとき、小笠原諸島には、1830年にハワイから移住してきたイギリス人やアメリカ人、ハワイ人などを中心にした人たち数10人が住み着いていた(『小笠原島誌』によれば、1830年の移住者は欧米人5名、ハワイ人17名、また、1862年の文久元年水野小笠原回収団の調査では、24戸、55人)。そして、こうした情報を得た長崎のオランダ商館長が、長崎奉行に対して、次のような忠告をしていた。すなわち、日本の領土と考えている小笠原島に外国人が許可なく定住していることは、後日の紛争の原因ともなり、とくにアメリカと中国との間の航路の要地に位置しているので、今後ますます重要度が高まってくるので、速やかに対処すべきだ、と。しかし、外国と関係を持ちたくない幕府は、この忠告を無視していた。ようするに、その程度の認識しか当時の支配層はもっていなかったのである。

英米にとっての小笠原諸島の重要性によりやく気づいた幕府は、文久元年(1861)、長らく放置してあった小笠原諸島の実質的な領有と開拓を進めるために、当時外国奉行であった水野忠徳に命じて咸臨丸を派遣し、小笠原諸島の回収に当たらせる。その結果、文久二年(1862)、八丈島から男女各15名の移住者が、開拓のために小笠原に送られることになった。このときの航海の記録を残した服部帰一は、その標題を『南島航海日誌』と名づけている。「小笠原島」＝「南島」という理解であった。しかし、その翌年には、尊攘派による外国人殺傷事件が頻発して外国との緊張が高まったことの影響を恐れ

て、早くも小笠原から日本人を撤退させてしまう。撤退の責任者は、咸臨丸で来島して以来「島長」を勤めていた小花作之助（後の作助）であった。

撤退から七年後の明治2年(1869)、かつての「小笠原島長」であった小花作助が、新政府による小笠原諸島の再回収を建議し、政府でもこのことが多少の話題になった。だが、発足間もない明治政府は、内外の難問、とくに外交問題としては樺太領有問題に忙殺され、小笠原再回収問題は後回しにされていた。

明治8年、その樺太問題が樺太・千島交換条約の締結によってようやく一段落したこともあって、小笠原の再回収が現実の課題となり、その年の10月に政府の再回収船が小笠原に派遣された。そのなかには小花作助もあり、再回収後の内務省小笠原島出張所長（島長）に再び任命されることになった。そして、日本からの入植が始まり、明治13年には、所管が内務省から東京府に移された。この年の人口は、117戸380人で、そのうち外国人は13戸62人であった。

小笠原諸島それ自体は、大量の植民を行うことができるような島ではない。放置しておけば、許可なく移住してきた外国人を通じてイギリスやアメリカなどのいずれかの領有するところになるかもしれないという思いから統治することになった、というのが実状であったのであろう。したがって、まだこの当時、小笠原諸島のさらに南の洋上に点在する島々や海域への関心は、政府の指導者層や文化人のあいだにはほとんど芽生えていなかったようである。

小笠原の開拓はなかなか興味深いものがある。幕末の外国奉行水野忠憲による回収後、八丈島で募った移住者たちに期待した開拓は、ここを基地とする捕鯨業をおこなうことが最大の狙いであったが、さらに本草学者阿部櫟斎の指導のもとで、山野を開墾しミカン、ウメ、モモなどの果樹類を植え、スギ、ヒノキ、マツ、タケなどの建築用材となる樹木を植えること、芭蕉布などの織物業をおこなうこと、サツマイモから焼酎を作ること、ベッコウをとり江戸の送ること、魚油をとること、といった計画も立てられていた。

明治政府の再回収後の入植者たちは、コーヒーやゴム、綿などの栽培やブタやヒツジの放牧などを試みるが、明治20年代には甘蔗（サトウキビ）栽培・精糖業が基幹産業になっていた。はからずも沖縄と同様、後の「南洋群島」統治のための実験場となったわけである。

ところで、実際、明治13年に建てられた「開拓小笠原之碑」の碑文は、内務卿大久保利通の撰文で、そのなかに「甲斐伊豆の山脈蜿蜒起伏し、此に至り而俛く、すなわち我が南門なり」と記されていたという。ところが、その後、何者かによって「而俛」の二文字を密かに削り取ったといわれている。これには、「我が国の南方への発展は、この地小笠原で尽きるものではない」という思いが込められていた。

日本本土のはるか南方洋上に浮かぶ小笠原諸島が、近代日本の「南の門」に定まってほどなくして、今度は、この小笠原が日本の「帝国の南門」へと変化していったのである。小笠原の向こう側に「南洋」が具体的なものとして姿が現れつつあった。

*本稿は、小松和彦「海を渡った壮士・森小弁―「南洋群島」以前の日本・ミクロネシア交流史の一断面―」『近代日本の自画像と他者像』（篠原徹編）柏書房、2000年を改稿したものである。

主要参考文献

- 石川栄吉『日本人のオセアニア発見』平凡社、1992年
- 川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』講談社、1996年
- 郷隆『南洋貿易五十年史』南洋貿易株式会社、1942年
- 志賀重昂『南洋時事』丸善、1887年（『志賀重昂全集』第三巻、所収）
- 田中弘之『幕末の小笠原』中央公論社、1997年
- 鈴木經勳『南洋探検実記』博文館、1892年（東洋文庫版、平凡社、1980年）
- 高山純『南海の大探検家 鈴木經勳——その虚像と実像』三一書房、1995年
- 田口卯吉「南洋経略論」『東京経済雑誌』第21巻、第513号、1890年
- 田畑道夫『小笠原島ゆかりの人々』文献出版、1993年
- 東京府『小笠原総覧』1929年
- 中島梓「明治34年のトラック在住日本人全員追放事件—なぜ森小弁だけが赦されたか—」
『太平洋学会誌』7月号、1988年
- 能仲文雄「赤道を背にして」（小菅嶺雄編『南洋群島 赤道を背にして』、南洋群島協会、1990年）
- 南洋庁『南洋庁施政十年史』1932年
- 服部徹「南洋策」（矢野暢『日本の南洋史観』中央公論社、1979年、の巻末資料）
- 長谷部言人「パラミクロネシア諸島」『南洋諸島 自然と資源』河出書房、1940年
- 森沢孝道『夢は赤道に：南洋に飛遊した土佐の男の物語』高知新聞社、1998年
- 森久男「解説」（『南洋探検実記』東洋文庫、平凡社、1980年）
- 矢野暢『日本の南洋史観』中央公論社、1979年
- 山本繁蔵編著『南洋群島トラック 実業界の面影』山本繁蔵、1932年
- 横田武「南洋先駆の第一人者森小弁翁」（『内南洋を築きし人々 其の三』南洋経済研究所、1944年）
- Peattie, Mark R. *Nan'yō: The Rise and Fall of the Japanese in Micronesia, 1885–1945* (University of Hawaii Press, 1988).

森小弁関係年表

1868（明治元）年〔明治維新〕

1869（明治2）年〔版籍奉還〕

小弁土佐郡北新町に生まれる

1871（明治4）年〔司法省設置〕

父可造大阪府大属。一家大阪へ

1872（明治5）年

可造大阪裁判所解部

1873（明治6）年〔後藤、板垣征韓論に破れ下野〕

1874（明治7）年〔愛国公党結成。立志社創立〕

1875（明治8）年

小弁大阪の小学校へ入学

1877（明治10）年〔西南戦争。大江ら立志社の獄〕

1878（明治11）年

可造奈良裁判所長

1880（明治13）年

可造死去、一家土佐へ帰郷

1881（明治14）年〔国会開設の詔勅。自由党結成〕

1882（明治15）年〔後藤、板垣洋行（翌年帰国）〕

小弁海南学校通学

1883（明治16）年

小弁兄正教を頼り際上阪

1884（明治17）年〔自由党解党。秩父、加波山など激化事件。朝鮮で甲申事変、土佐などで義勇兵募集〕

1885（明治18）年

義兄芝亭実忠政治講談で大阪へ 小弁大阪事件に連座

1887（明治20）年〔後藤大同団結運動始める〕

1888（明治21）年〔大隈の条約改正交渉始まる〕

1889（明治22）年〔大日本帝国憲法発布。後藤入閣〕

大隈の条約改正に反対 芝亭『去夢燈』発行 小弁上京

1890（明治23）年〔大江、中江兆民ら七人第一回総選挙に当選。『浮城物語』刊。第一回帝国議会開かれる〕

大江卓、後藤象二郎の玄關番に。東京専門学校に通学？

1891（明治24）年

一屋商店入社。南洋へ出航

1892（明治25）年

小弁トラック諸島に上陸 武器を手に島々に遠征

1893（明治26）年

一屋商店閉鎖。小弁コブラ仲買人として独立

1894（明治27）年〔日清戦争〕

1896（明治29）年〔トラック諸島で日本人の赤山白三郎殺害される〕

火薬事故で小弁右手首を失う。治療のため一時帰国。以後「左拳」と号する

- 1898（明治31）年〔トラック諸島の領有権スペインからドイツへ。日本人会十四人に増加〕
曾長の娘、イサベル（日本名伊佐）と結婚
- 1899（明治32）年
第一子長女が誕生
小弁を除くトラック諸島の日本人追放。日本人一人の生活が十五年間続く
- 1904（明治37）年〔日露戦争〕
- 1907（明治40）年
小弁高知の親せきにはがき
- 1914（大正3）年〔第一次世界大戦 日本軍がトラック諸島に進駐〕
小弁南洋群島守備隊の政務顧問に
- 1917（明治6）年
小弁婚姻届けを高知の三里村役場に提出
- 1918（大正7）年
小弁水曜島に学校建設。住民に民間治療を施す
- 1919（大正8）年〔南洋群島日本の委任統治領に〕
南洋の文化紹介の功績で小弁に高知県知事から木杯
- 1920（大正9）年〔第一回国勢調査。南洋群島の日本人三千三百人〕
- 1922（大正11）年〔パラオに南洋庁発足、トラックに支庁設置〕
- 1923（大正12）年
小弁の最初の孫正隆生まれる（孫は全部で九十四人に）
- 1926（大正15）年
小弁・イサベル夫妻に十一人目の子供、六郎生まれる
- 1931（昭和6）年〔満州事変〕
小弁の三男、三郎日本軍に召集される
小弁このころまでに水曜島の大曾長に就任
- 1933（昭和8）年〔人気漫画「冒険ダン吉」の連載始まる〕
- 1934（昭和9）年
小弁日本の学者と学術問答
- 1937（昭和12）年〔日中戦争〕
- 1939（昭和14）年〔第二次世界大戦 トラック諸島が日本の連合艦隊の基地に〕
小弁の四男、四郎第四十師団に入隊
小弁に日本政府から勲八等瑞宝章
- 1940（昭和15）年
夏島に小弁の顕彰碑
- 1941（昭和16）年〔太平洋戦争〕
- 1944（昭和19）年〔米軍機によるトラック大空襲〕
- 1945（昭和20）年〔第二次世界大戦終結〕
小弁七十五歳で死去
- （高知新聞社編・刊『夢は赤道に一南洋に雄飛した土佐の男の物語』1998年より）